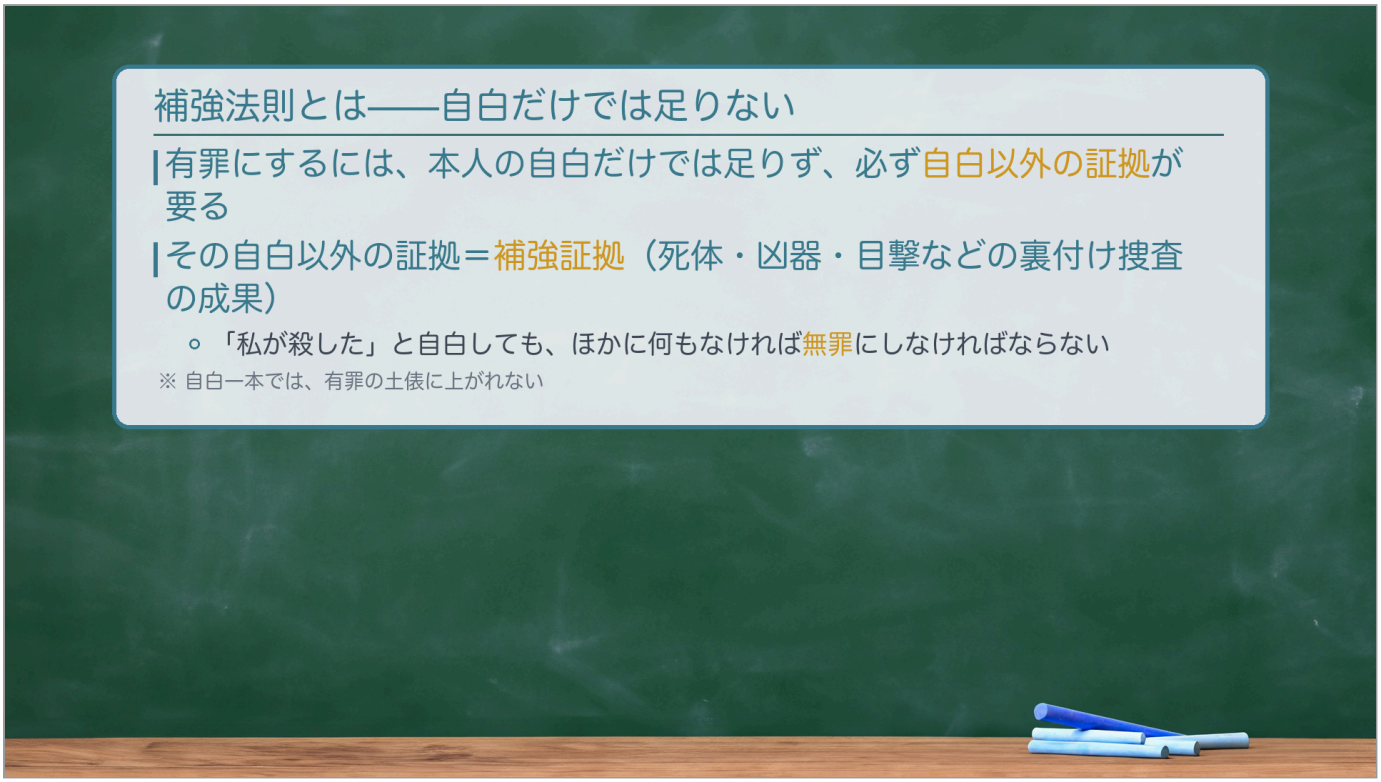
#31 補強法則・共犯者の自白

第4章 公判・証拠法 ⑧／動画の内容を見返し用にまとめたものです（動画には含みません）。

1 補強法則とは——自白だけでは足りない

短答・論文共通



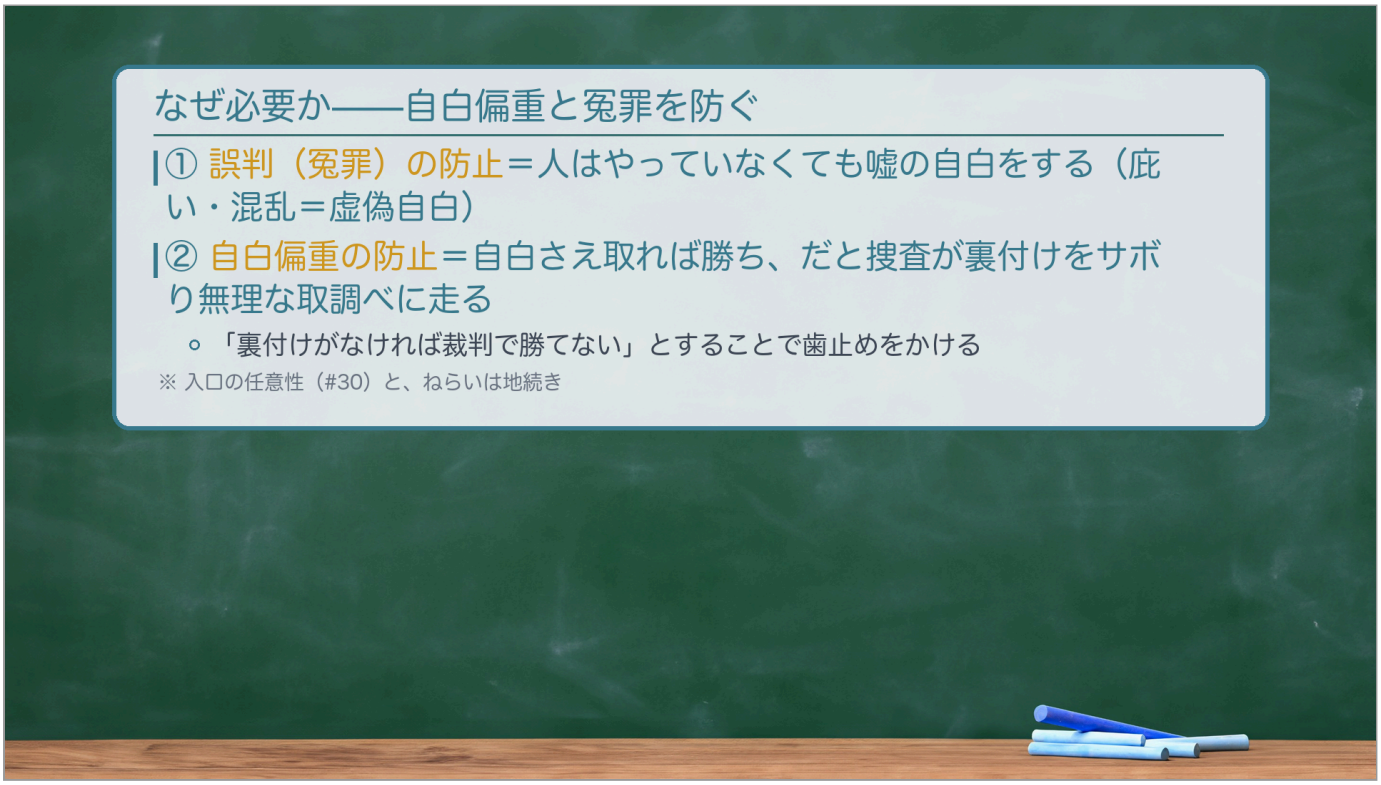
図：補強法則の意義——自白だけでは有罪にできないというルール

補強法則とは、被告人を有罪にするためには本人の自白だけでは足りず、必ず自白以外の証拠（**補強証拠**）が必要だというルールです。裏付け捜査の成果——死体、凶器、目撃証言といった客観証拠——がなければ、自白一本では有罪の土俵に上がれません。

- 補強証拠の例：死体・凶器・目撃証言・盗難届など
- 補強証拠が一切ない場合は無罪

2 なぜ必要か——自白偏重と冤罪を防ぐ

短答・論文共通



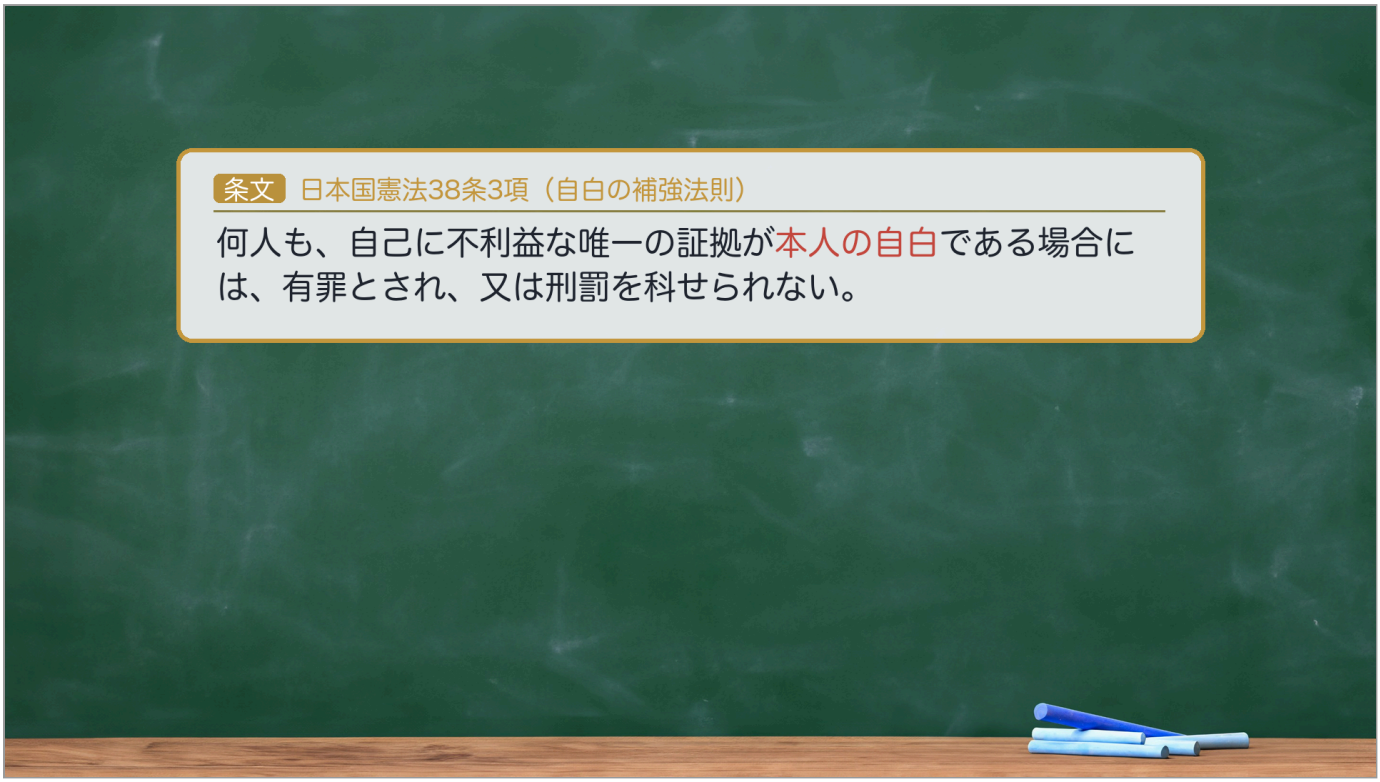
図：補強法則の趣旨——誤判防止と自白偏重防止

趣旨は二つあります。

- **誤判の防止**：人は虚偽の自白をすることがある。庇ったり、追い詰められて混乱したりして、冤罪が生まれる。
- **自白偏重の防止**：裏付けがなければ有罪にできないとすれば、捜査機関が無理な取調べに走ることへの歯止めになる。

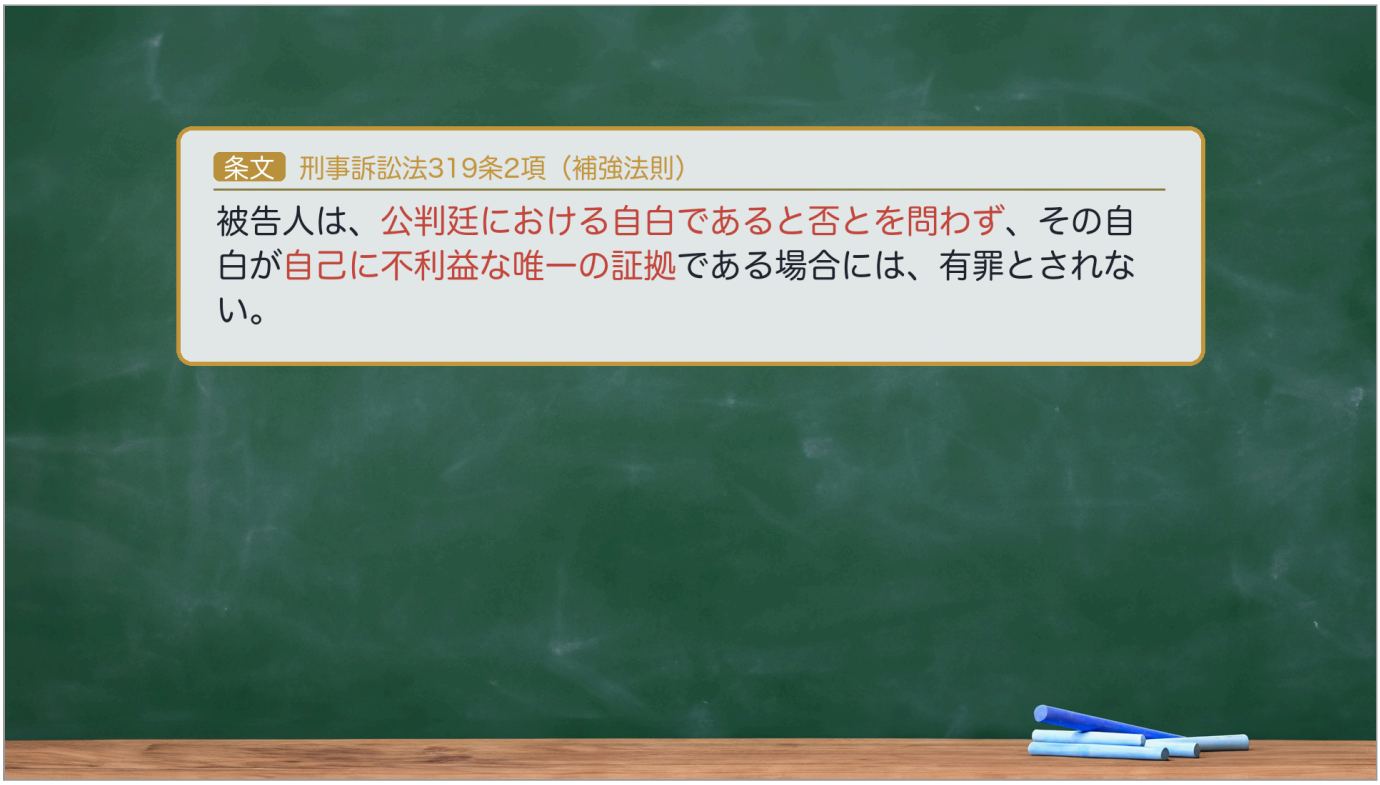
3 根拠条文——憲法38条3項と319条2項

短答・論文共通



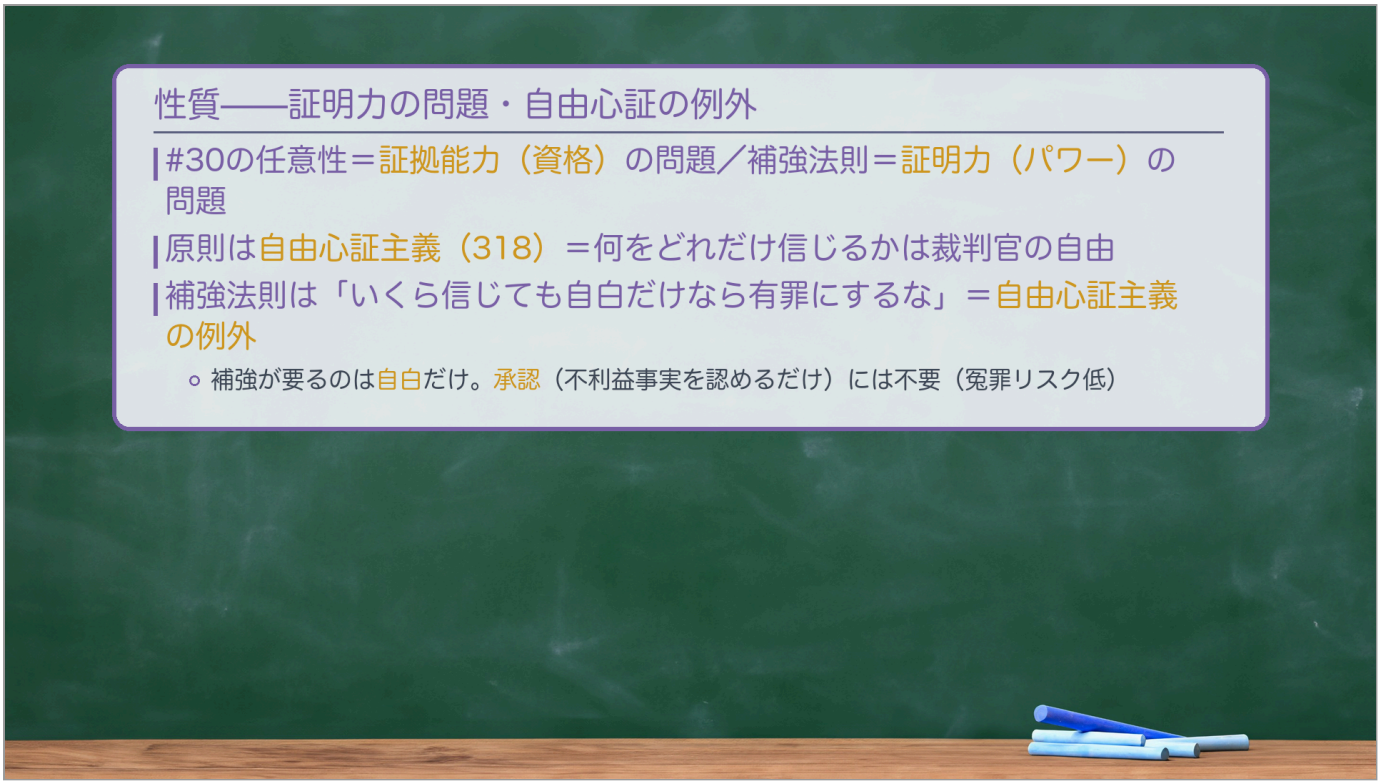
図：憲法38条3項——自己に不利益な唯一の証拠が自白の場合は有罪とされない

根拠は、まず憲法。38条3項です。自己に不利益な唯一の証拠が本人の自白である場合には、有罪とされ、又は刑罰を科せられない。冤罪防止は、憲法レベルの要請です。

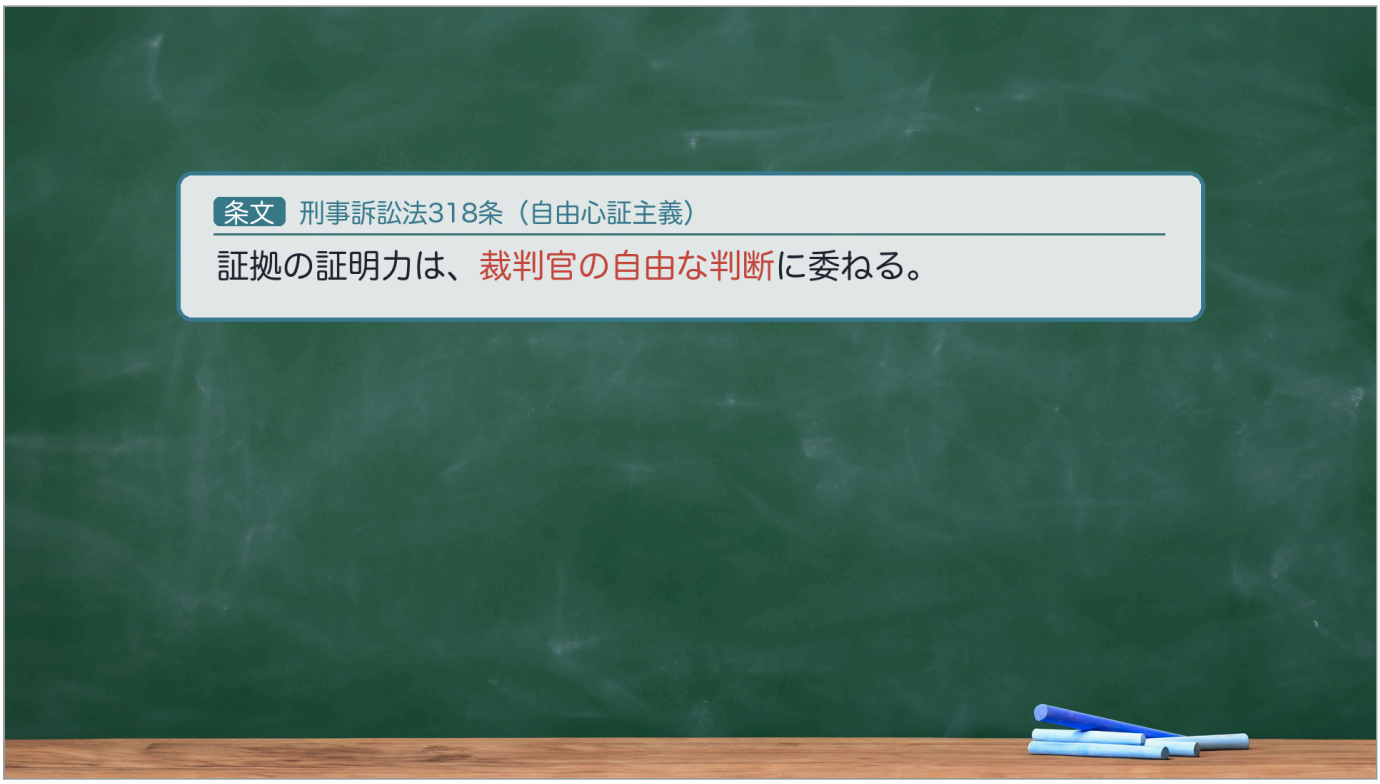


図：刑訴319条2項——「公判廷における自白であると否とを問わず」が重要

これを受けた刑訴が、319条2項。公判廷における自白であると否とを問わず。自己に不利益な唯一の証拠が本人の自白なら、有罪とされない。「公判廷であると否とを問わず」という文言が後の論点で効いてきます。



図：補強法則は証明力の制限——自由心証主義（318条）の例外



図：318条——証拠の証明力は裁判官の自由な判断に委ねる

法律上の位置づけをおさえます。

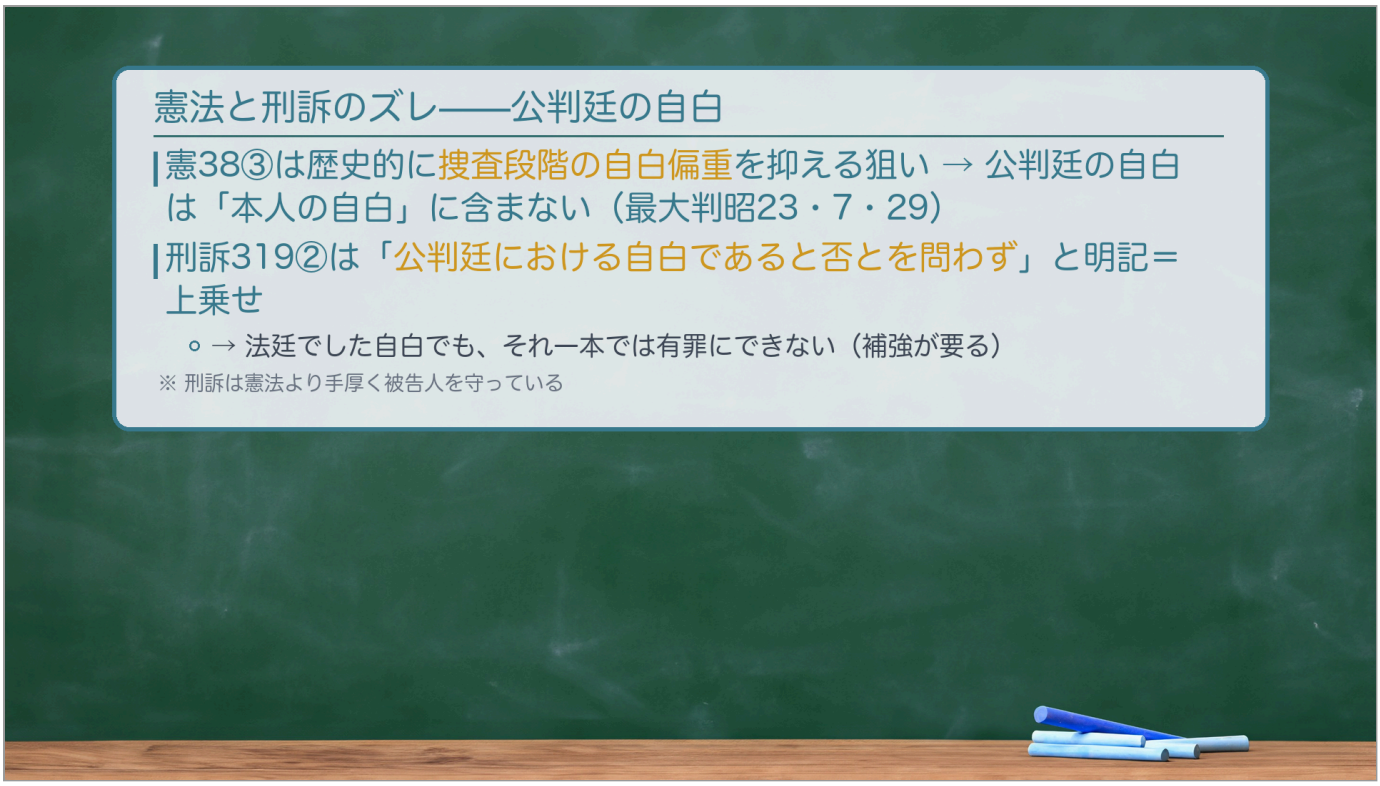
- **前回の任意性（319条1項）**は、証拠能力＝証拠として使う「資格」の問題。
- **補強法則（319条2項）**は、証明力＝有罪にするパワーの問題。

通常は何をどれだけ信じるかは裁判官の自由（318条）ですが、補強法則は「いくら信じても自白だけなら有罪にするな」と法律で縛りをかけます。これが**自由心証主義の例外**としての補強法則の本質です。

補強が要るのは「自白」だけ。「承認」（不利益な事実を認めるだけ）には補強不要——冤罪リスクが低いためです。

5 憲法と刑訴のズレ——公判廷の自白

短答・論文共通



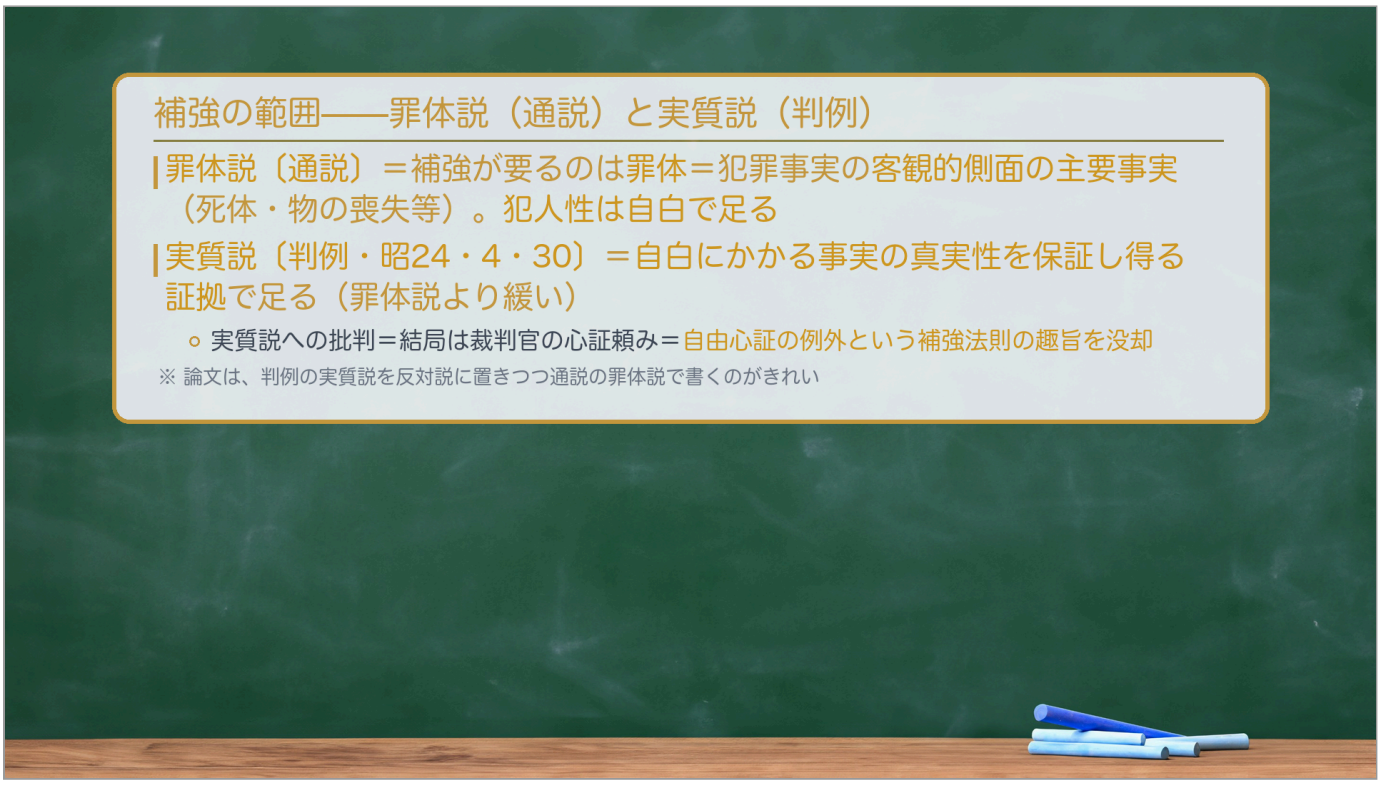
図：憲法38条3項と刑訴319条2項のズレ——公判廷の自白の扱い

- 憲法38条3項は歴史的に捜査段階の自白偏重を抑える狙いがある。法廷での自白には補強は要らないという解釈も成り立つ。
- 判例（**最大判昭和23年7月29日**）も、公判廷の自白は憲法の「本人の自白」に含まれないとした。
- しかし刑訴が上乗せ——319条2項が「公判廷における自白であると否とを問わず」と明記。

刑訴は憲法より手厚く被告人を守っています。

6 補強の範囲——罪体説と実質説

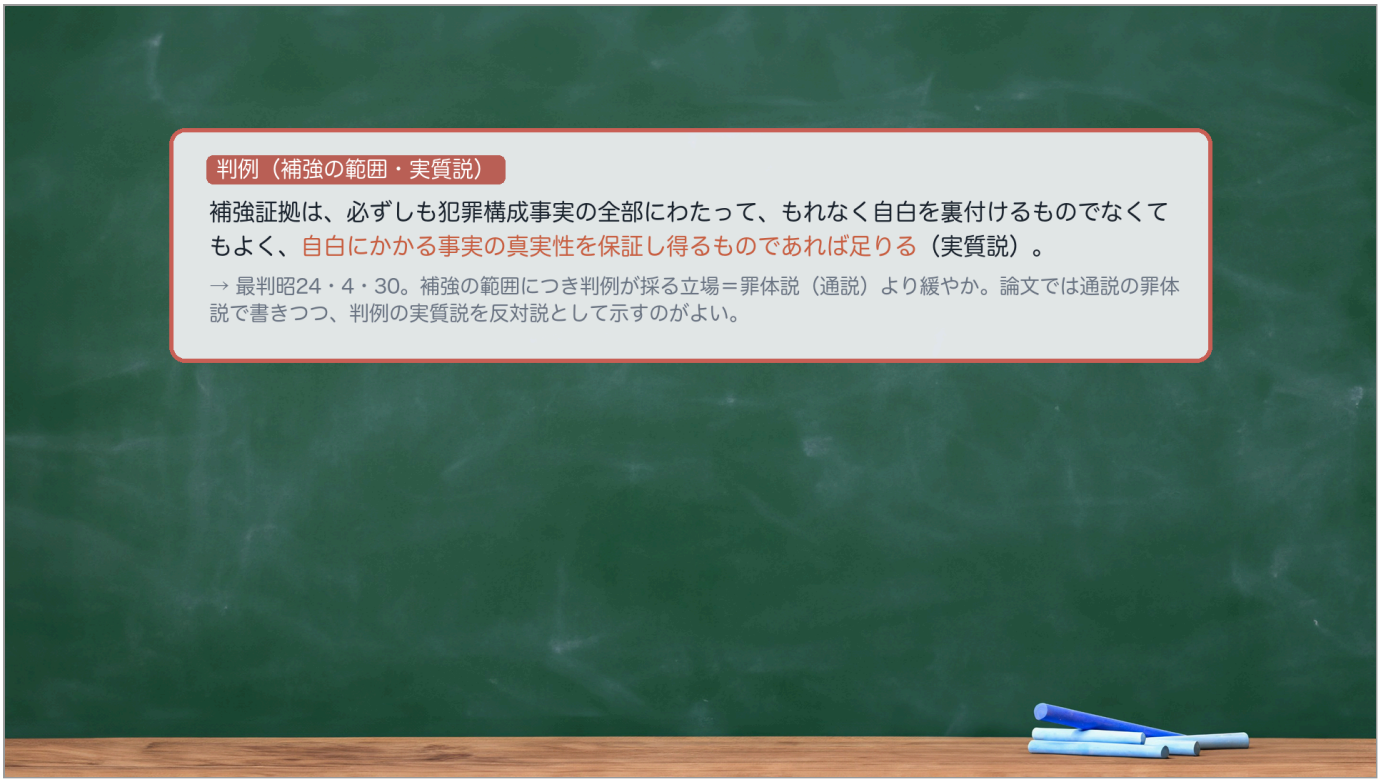
短答・論文共通



図：補強の範囲——罪体説（通説）と実質説（判例）の対立

「私がAを殺した」と自白した。何を裏付ければ足りるか。

- **罪体説**（通説）：補強が要るのは犯罪事実の客観的側面の主要事実（罪体）のみ。被告人が犯人だ、までは自白で足りる。
- **実質説**（判例・**最判昭和24年4月30日**）：自白にかかる事実の真実性を保証し得る証拠で足る。ただし実質説は「結局裁判官の心証頼み」と批判が強い。

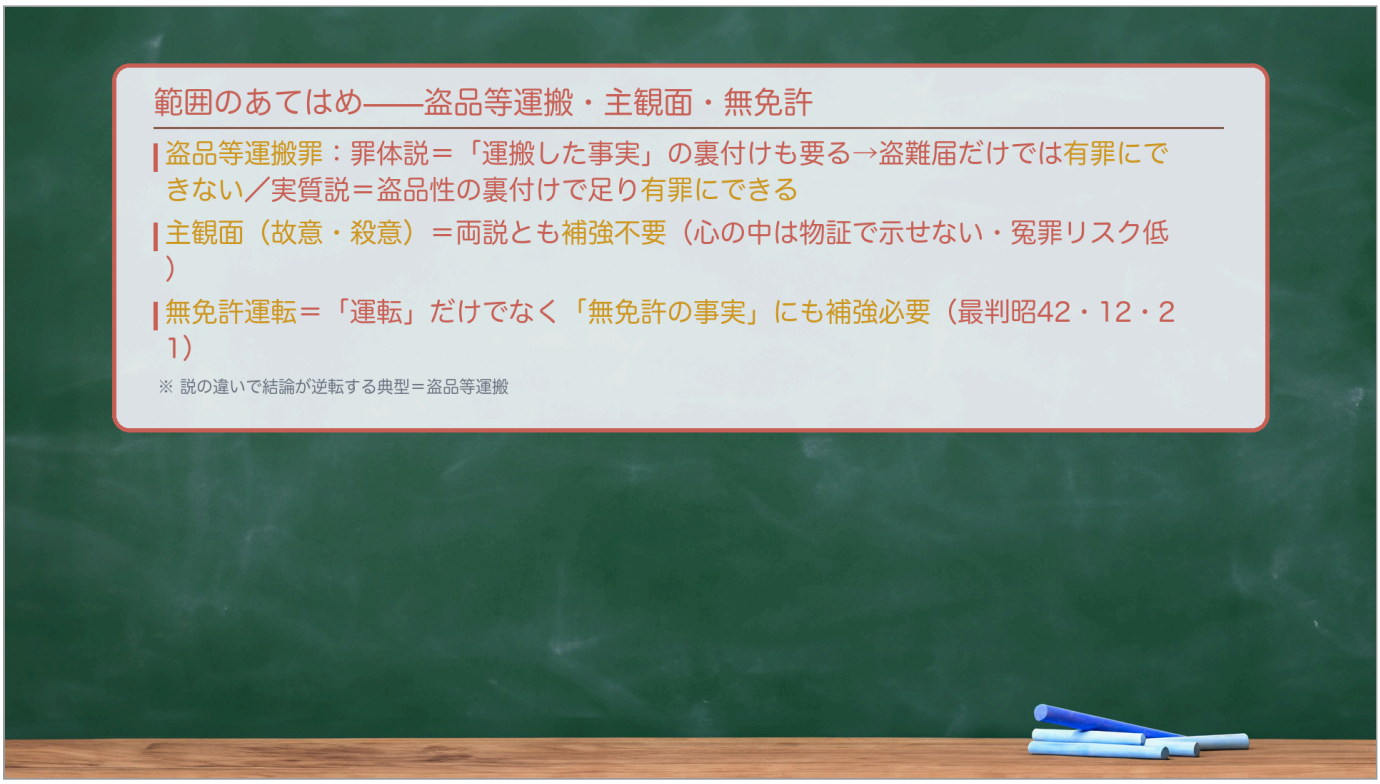


図：実質説の判例——自白にかかる事実の真実性を保証し得る証拠で足りる

論文では判例の実質説を紹介しつつ通説の罪体説で書くのが整理された型です。

7 範囲のあてはめ——盗品等運搬と無免許

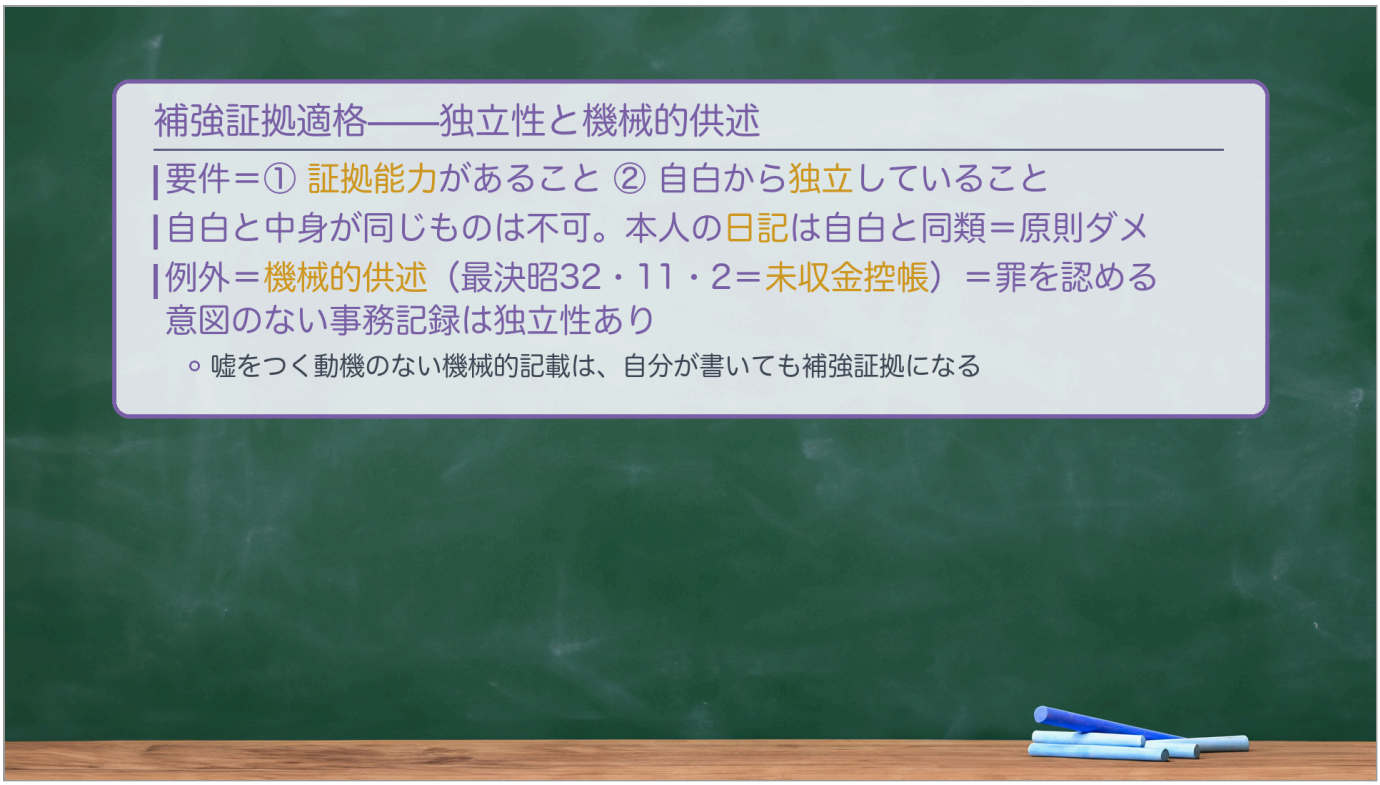
短答・論文共通



図：説の違いで結論が変わる具体例——盗品等運搬と無免許運転

盗品等運搬罪の例 - 自白：「盗品のバイクを運びました」 - 証拠：自白 ＋ 持ち主の盗難届のみ - 罪体説→運搬した事実の裏付けも要る→盗難届だけでは足りず有罪にできない - 実質説→盗品だという裏付けがあれば自白と合わせ真実性が担保→盗難届だけで有罪にできる

補足 - 主観面（故意など）は両説で補強不要 - 無免許運転の事実には補強が要る（**最一小判昭和42年12月21日**）

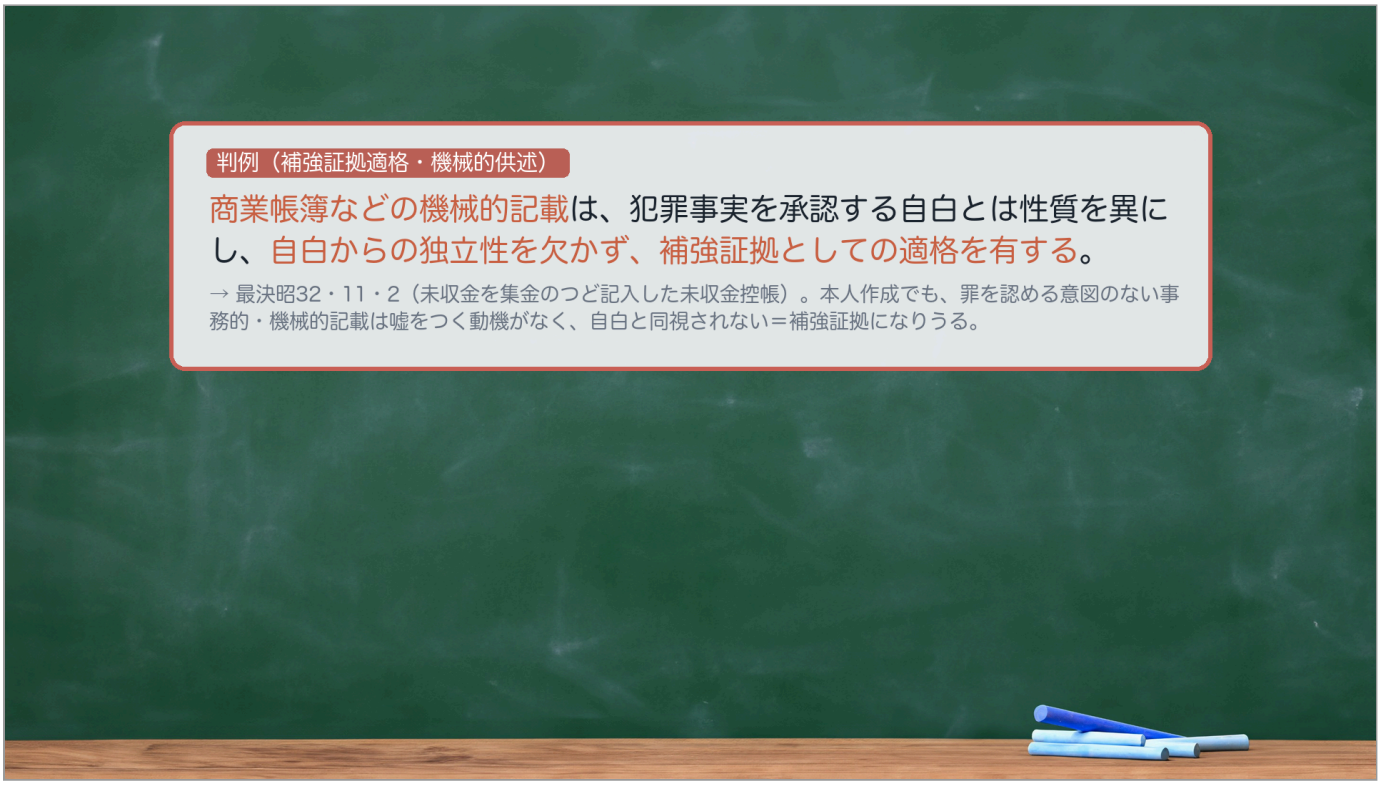


図：補強証拠の適格要件——証拠能力と自白からの独立性

何であれば裏付けに使えるか。要件は二つです。

1. **証拠能力があること**
2. **自白から独立していること**——自白と内容が同じものはいくら集めても裏付けにならない

本人の日記は自白と同類なので原則ダメです。ただし例外があります。

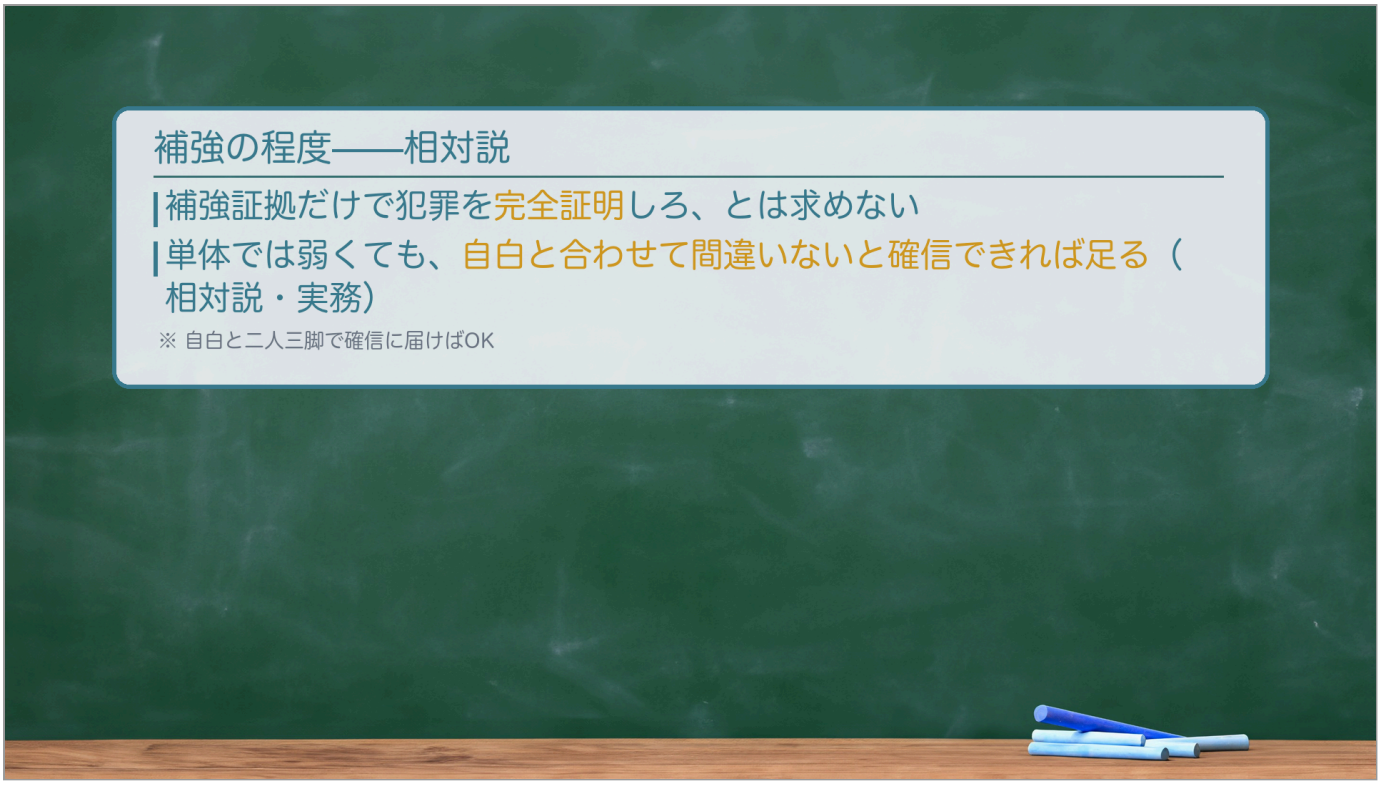


図：機械的供述の例外——未収金控帳は独立した補強証拠になる（最決昭和32年11月2日）

商売の未収金を機械的に記した未収金控帳は、罪を認める意図で書いたものではなく嘘をつく動機がない機械的な記載。よって自白とは独立した補強証拠になるとされました（**最二小決昭和32年11月2日**）。

9 補強の程度——相対説

短答・論文共通



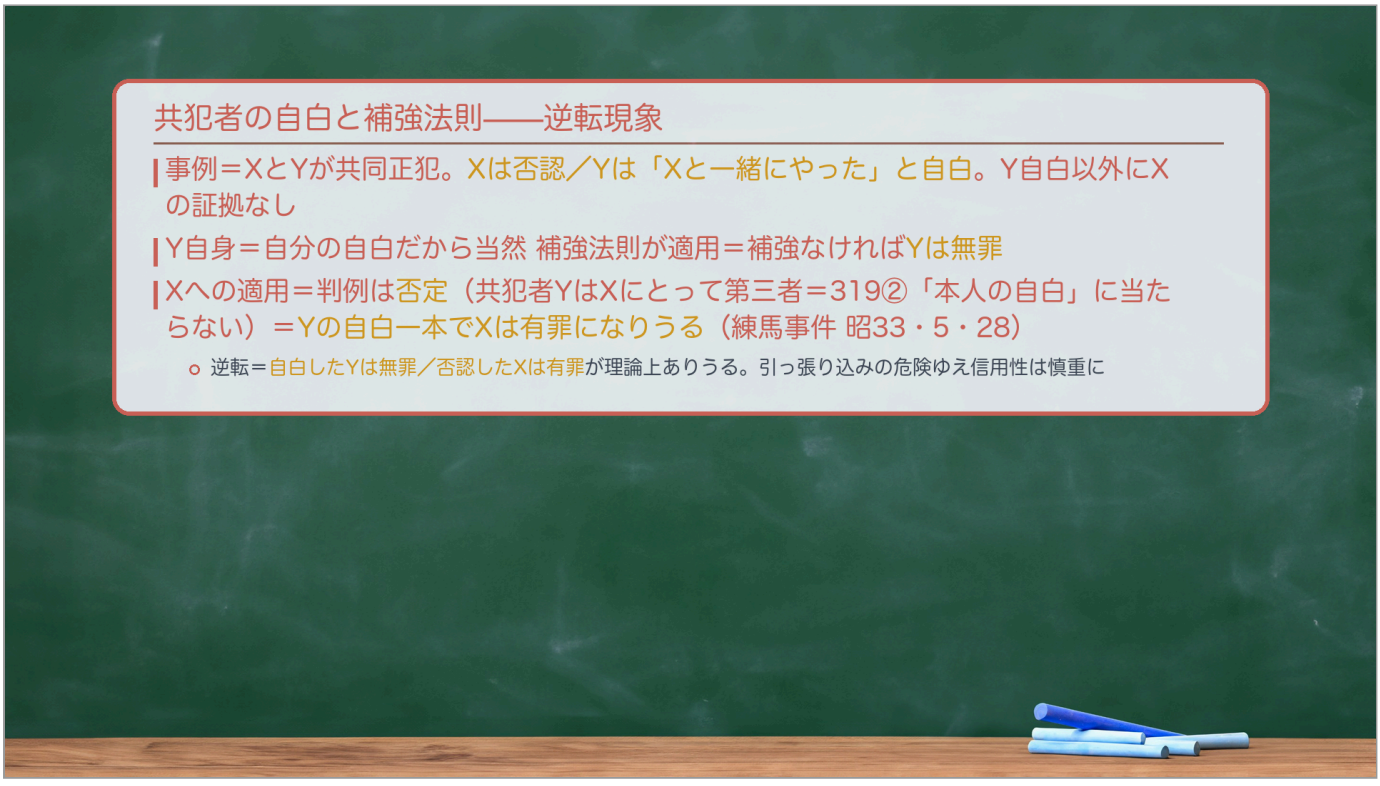
図：補強の程度——実務は相対説（自白と合わせて確信できれば足る）

- **絶対説**：補強証拠だけで犯罪を完全に証明しなければならない
- **相対説**（実務）：単体では弱くても、自白と合わせて間違いないと確信できれば足りる

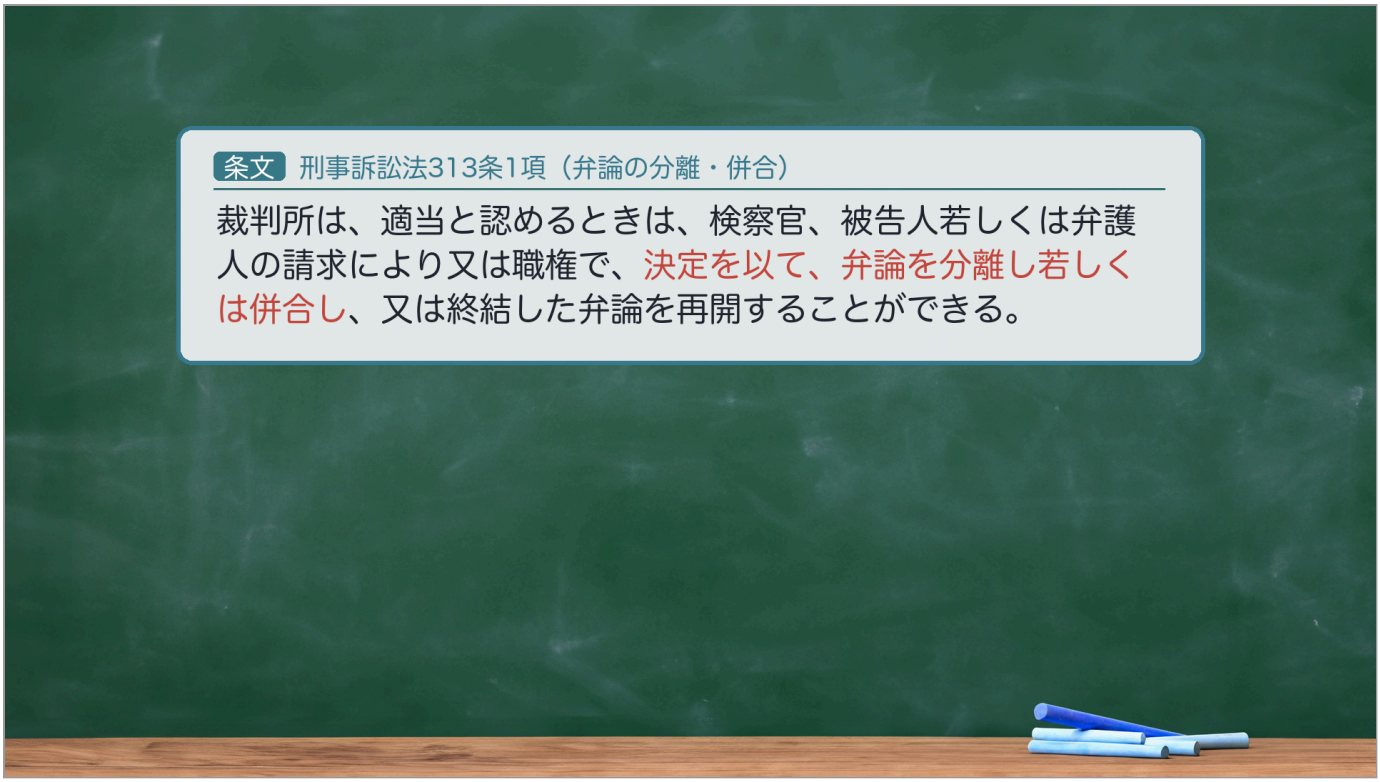
実務は**相対説**で動いています。

10 共同被告人とは——同じ法廷の二人

短答知識



図：共同被告人——弁論を併合された複数の被告人

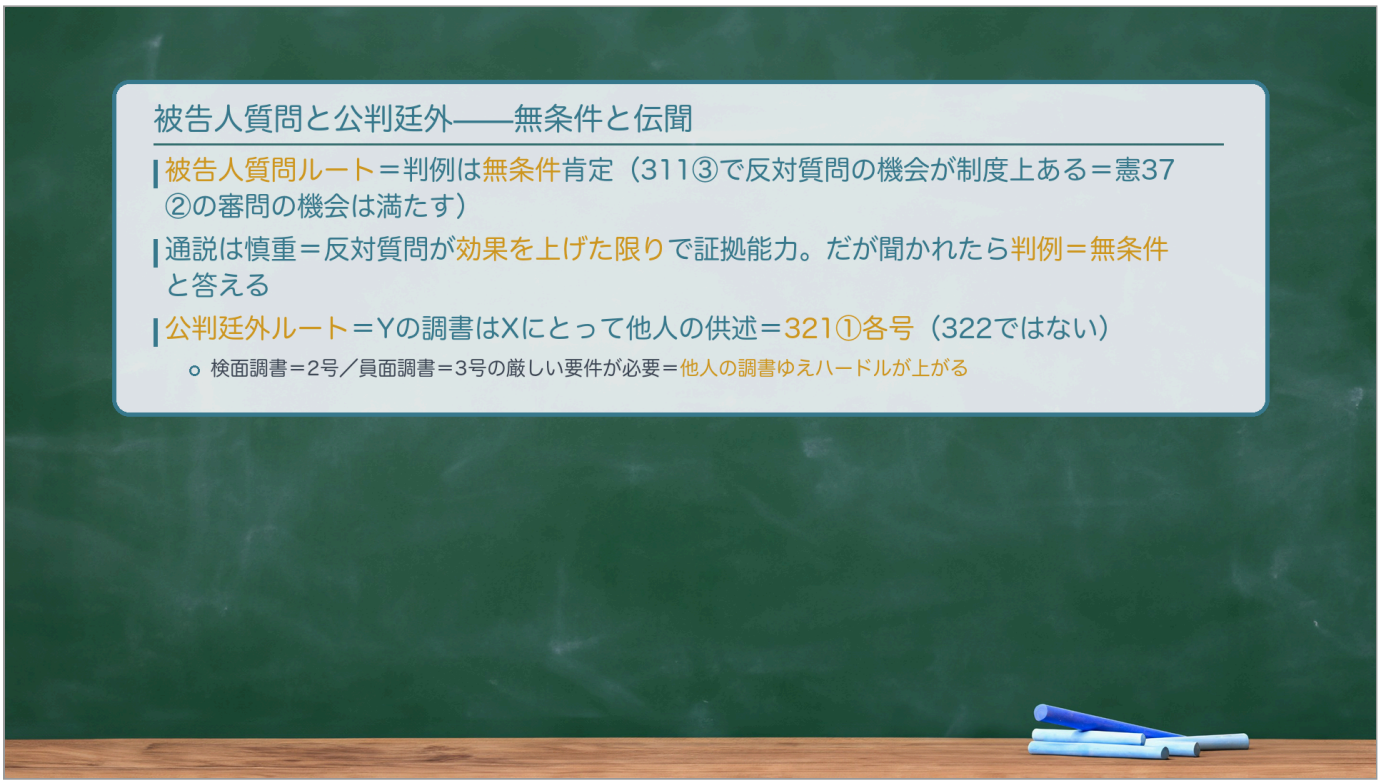


図：313条1項——弁論の分離・併合の根拠条文

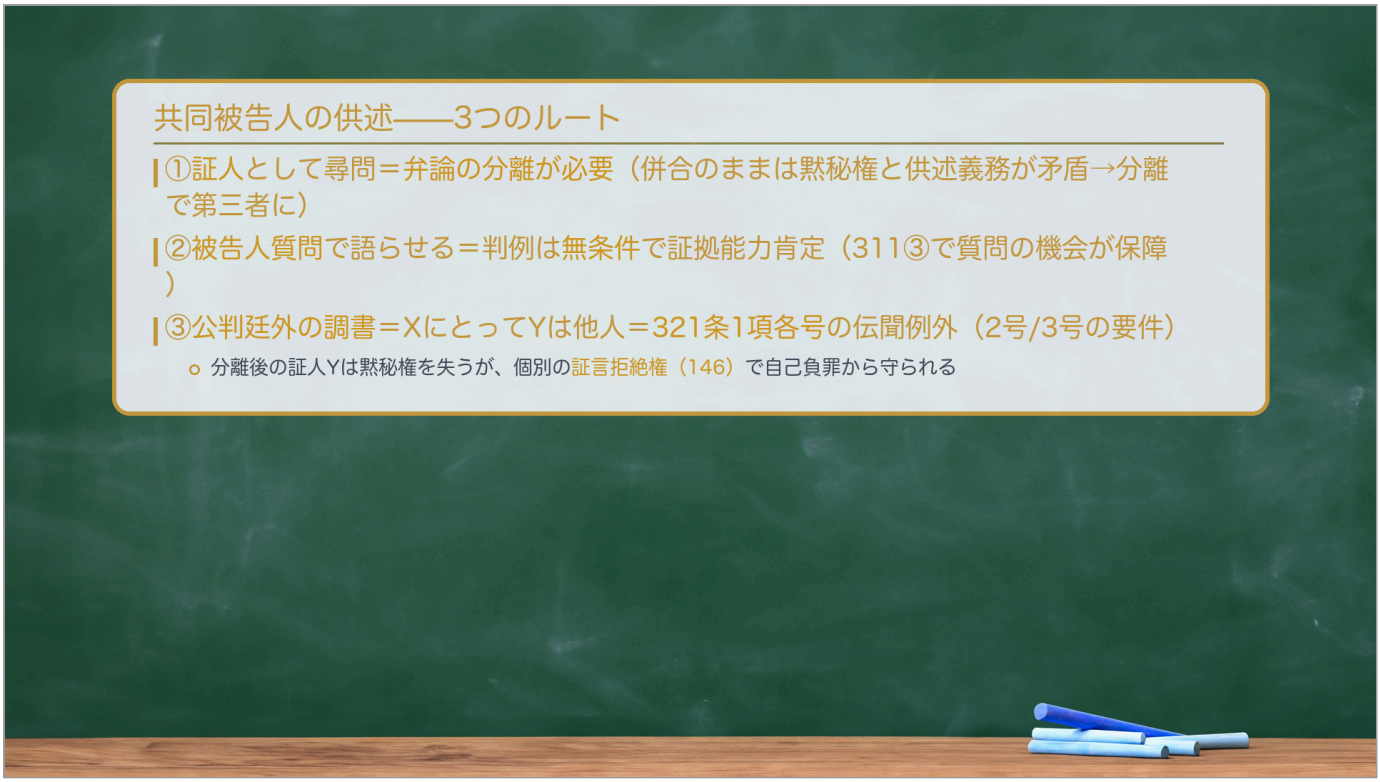
複数の事件が**併合審理**されるとき、その数人の被告人を**共同被告人**と呼びます。本来は別々の裁判を、313条1項で弁論を併合し同じ法廷で進めるわけです。問題は、隣のYの供述——「Xと一緒にやった」とYが語った。このYの言葉をXの有罪証拠に使えるか。

11 共同被告人の供述——3つのルート

短答・論文共通



図：共同被告人の供述を使う3つのルート



図：3ルートの整理表——証人ルートは弁論分離が前提

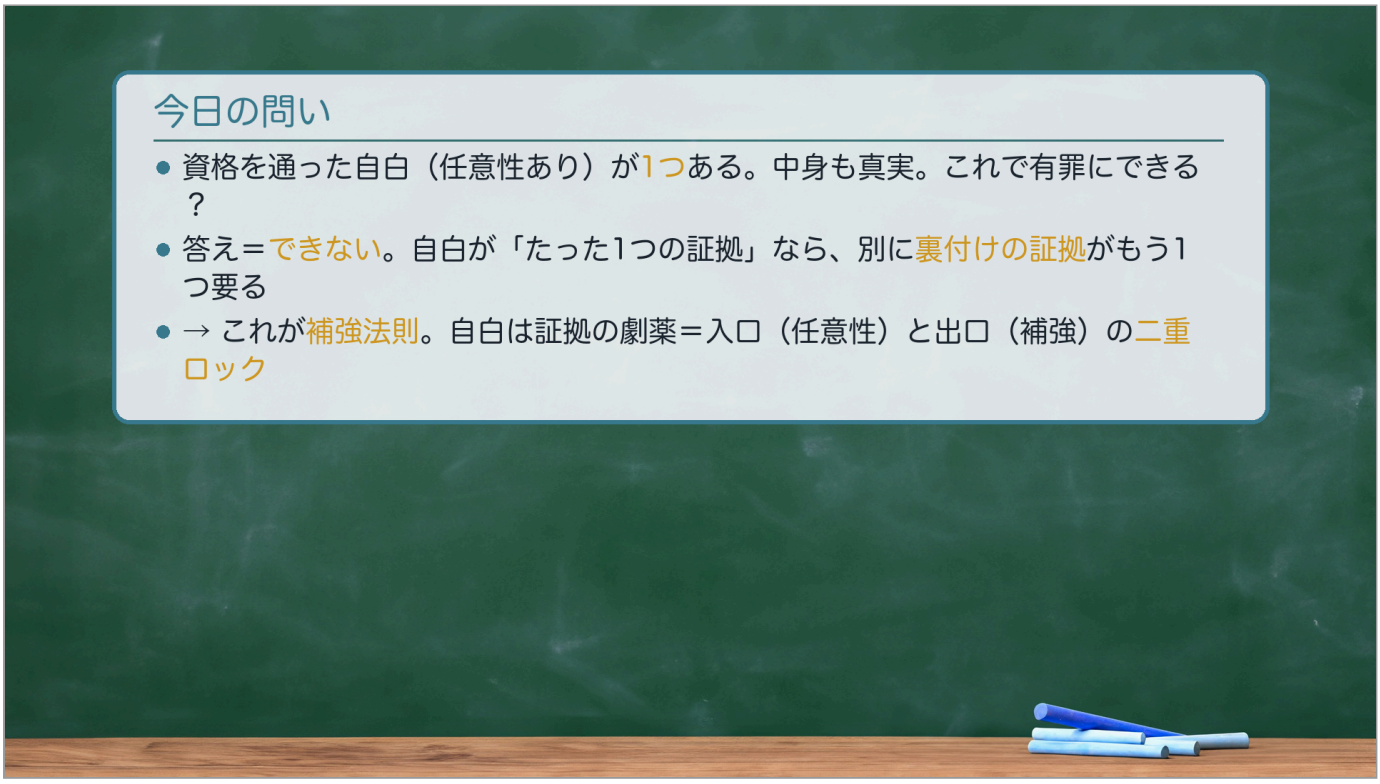
ルート①：証人として尋問する - 壁：被告人には黙秘権、証人には供述義務——併合のままでは証人にできない - 解決：弁論の分離でYを切り離せば第三者となり証人になれる（143条。146条で不利な質問を拒否できる）

ルート②：併合のまま、被告人質問で語らせる - 判例は無条件で証拠能力を認める（311条3項） - 質問できる機会があるかが重要——憲法37条2項の審問の機会は満たされる（判例）

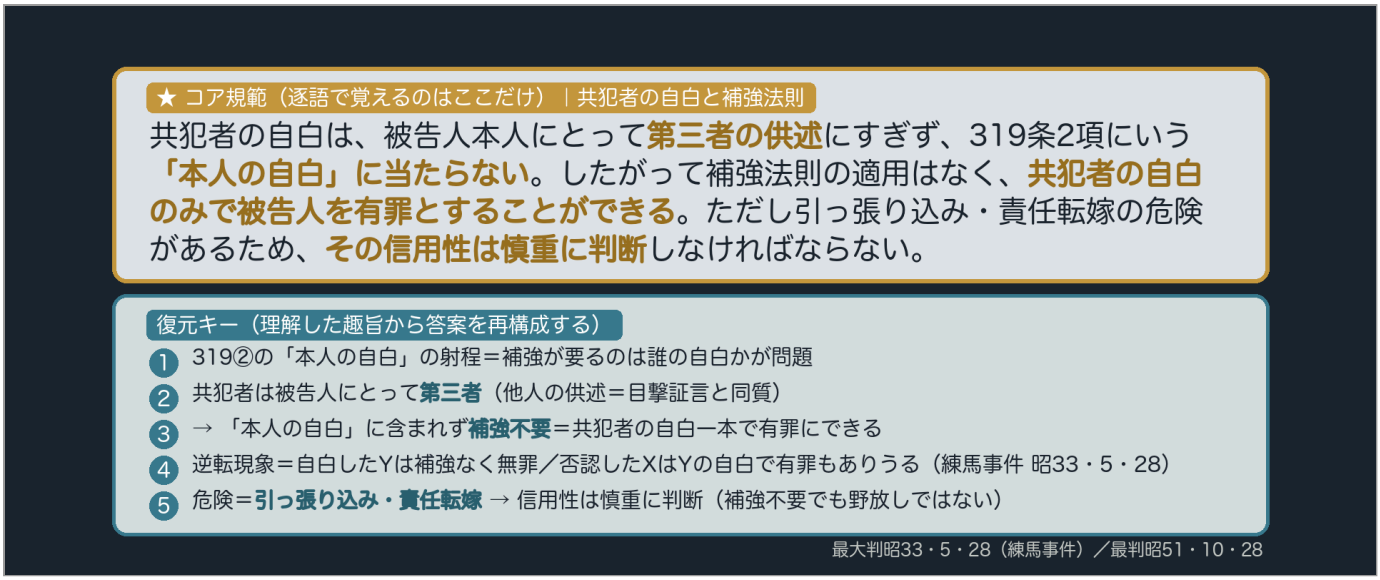
ルート③：Yの捜査段階の調書を使う - XにとってYは他人——被告人本人の322条ではなく321条1項各号で扱う - 検察官面前調書は2号、警察官面前調書は3号の要件

12 共犯者の自白と補強法則——逆転現象

短答・論文共通



図：逆転現象——自白したYは補強なしで無罪になりうる、否認したXは有罪になりうる



図：共犯者の自白と補強法則——規範のまとめ（練馬事件・最判昭和51年）

核心の論点です。XとYが殺人の共同正犯。Xは否認、Yは「Xと一緒にやった」と自白。

- Yには自分の自白があるので補強法則が適用——死体や凶器がなければYは無罪
- あるのは共犯者Yの自白だけ——これ一本でXを有罪にしてよいか

判例の結論：共犯者の自白に補強法則は適用されない。

理由は、YはXにとって第三者だから。他人の供述は目撃証言と同じ扱いになります。

- 自白したYは補強なしで無罪になりうる
- 名前を出されたXは、Yの自白一本で有罪になりうる

この逆転現象が判例の帰結です（**練馬事件・最大判昭和33年5月28日**、**最一小判昭和51年10月28日**も同旨）。ただし共犯者の自白は危険な証拠——信用性は慎重に判断するとされます。

◆ 短答ひっかけ

- **補強法則は「証拠能力」の問題ではなく「証明力」の問題**——任意性（319条1項）は証拠能力、補強（319条2項）は証明力と区別する
- **憲法38条3項は公判廷の自白に及ばない**（最大判昭和23年7月29日）——しかし刑訴319条2項は「公判廷であると否とを問わず」と上乗せ
- **罪体説では主観面（故意など）には補強不要**——客観的側面の主要事実のみが対象
- **無免許運転の事実には補強が要る**（最一小判昭和42年12月21日）——見落としやすい
- **共同被告人の被告人質問での供述**——判例は無条件で証拠能力を認める（分離は不要）
- **共犯者の自白に補強法則は適用されない**——YはXにとって第三者だから319条2項の「本人の自白」に当たらない（逆転現象に注意）

◆ 論文の型

補強法則の論点（範囲・適格・程度）

```
①問題提起：本件では自白のみを証拠として有罪とすることができるか（319条2項）

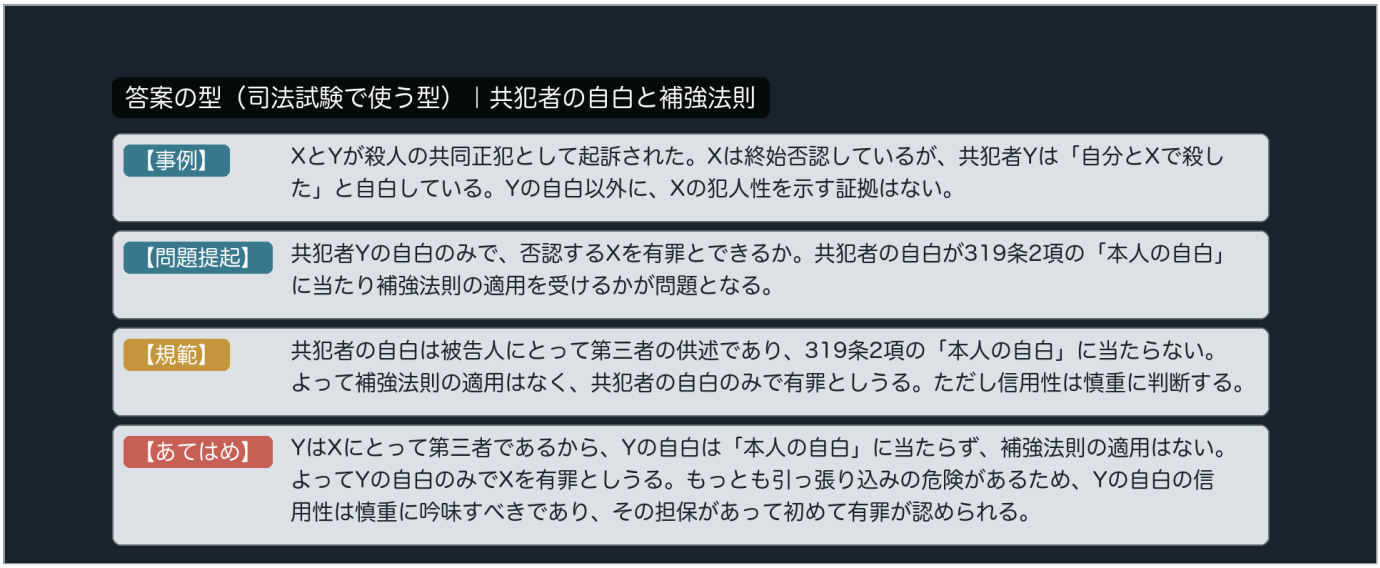
②性質の確認：
補強法則は証明力の制限であり、自由心証主義（318条）の例外。
根拠は憲法38条3項および刑訴319条2項。

③補強の範囲：
通説（罪体説）では補強が要るのは犯罪事実の客観的側面の主要事実（罪体）のみ。
判例（実質説・最判昭和24年4月30日）は自白にかかる事実の真実性を保証し得る証拠で足るとする。
→ 論文では罪体説を基軸に論じる。

④補強証拠適格：
証拠能力があること ＋ 自白から独立していること。
機械的供述（未収金控帳等）は例外として独立性を認める（最二小決昭和32年11月2日）。

⑤補強の程度：
相対説（実務）――単独では弱くても、自白と合わせて確信できれば足りる。
```

共犯者の自白と補強法則



図：論文の型——共犯者の自白への補強法則不適用の規範・あてはめ

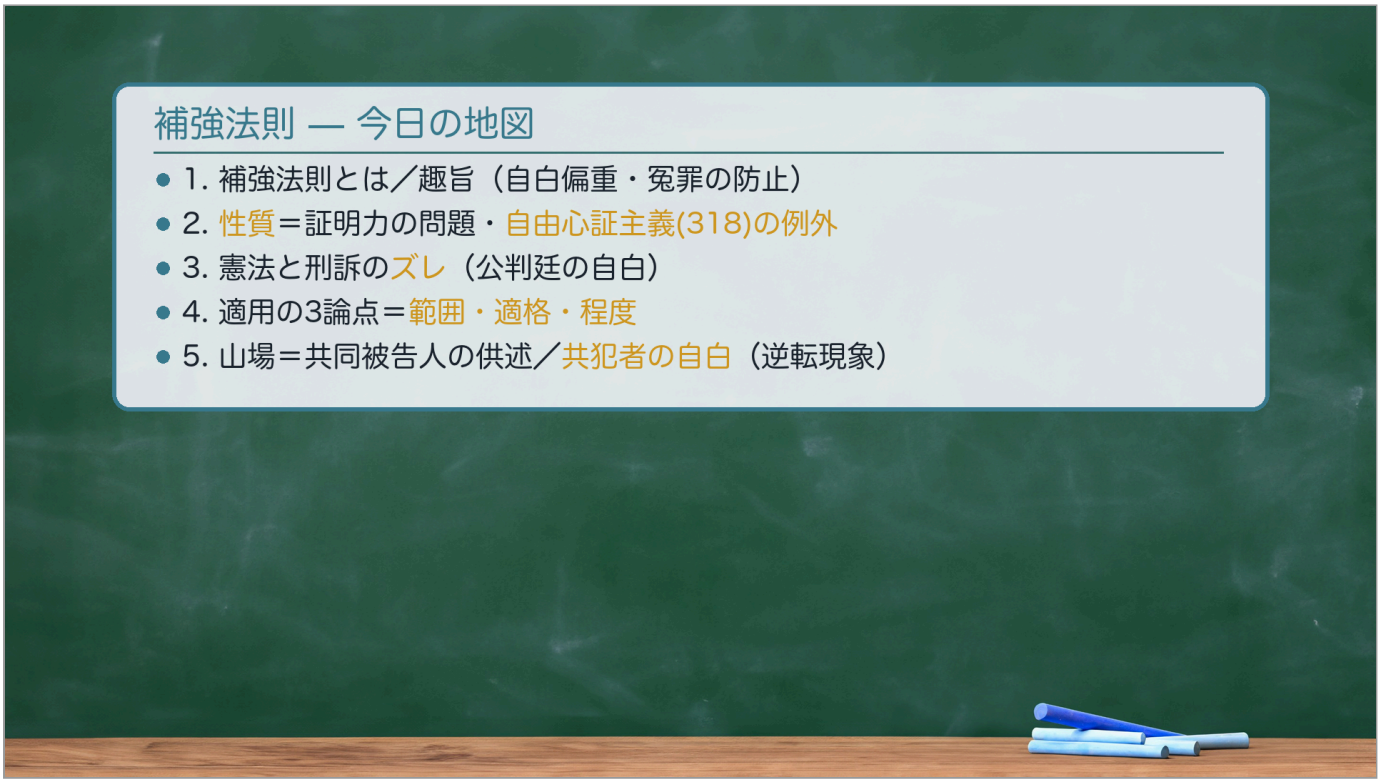
①問題提起：共犯者Yの自白のみでXを有罪にできるか（319条2項の「本人の自白」の射程）

②規範：
共犯者の自白は、被告人Xにとって第三者（Y）の供述である。
319条2項の「本人の自白」に当たらない。
→ 補強法則の適用はなく、共犯者の自白のみで有罪にできる（練馬事件・最大判昭和33年5月28日）。

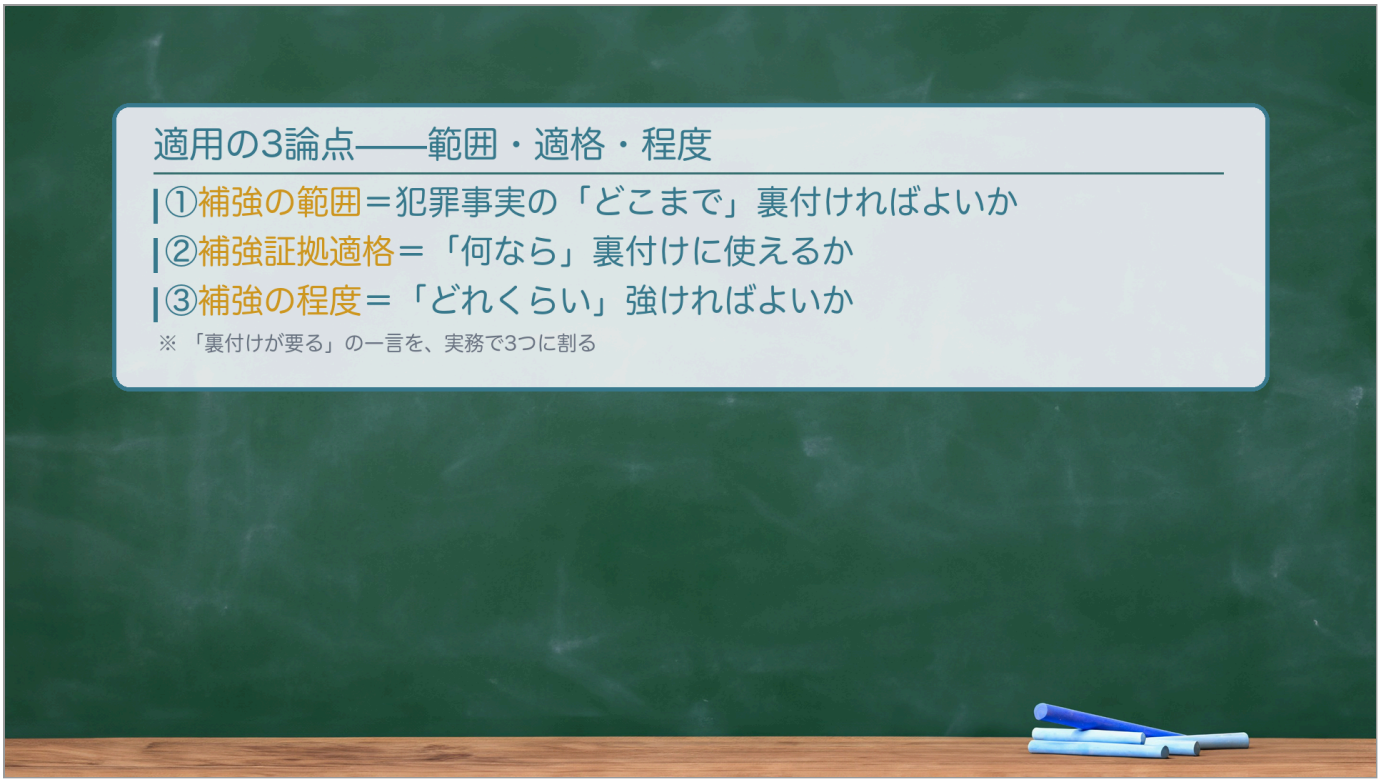
③あてはめ：
XにとってYは第三者か──共同正犯であっても別人格だから第三者。
319条2項の射程外 → 補強不要。

④留意点：
共犯者の自白は引き込みの危険がある危険な証拠──信用性は慎重に判断する。

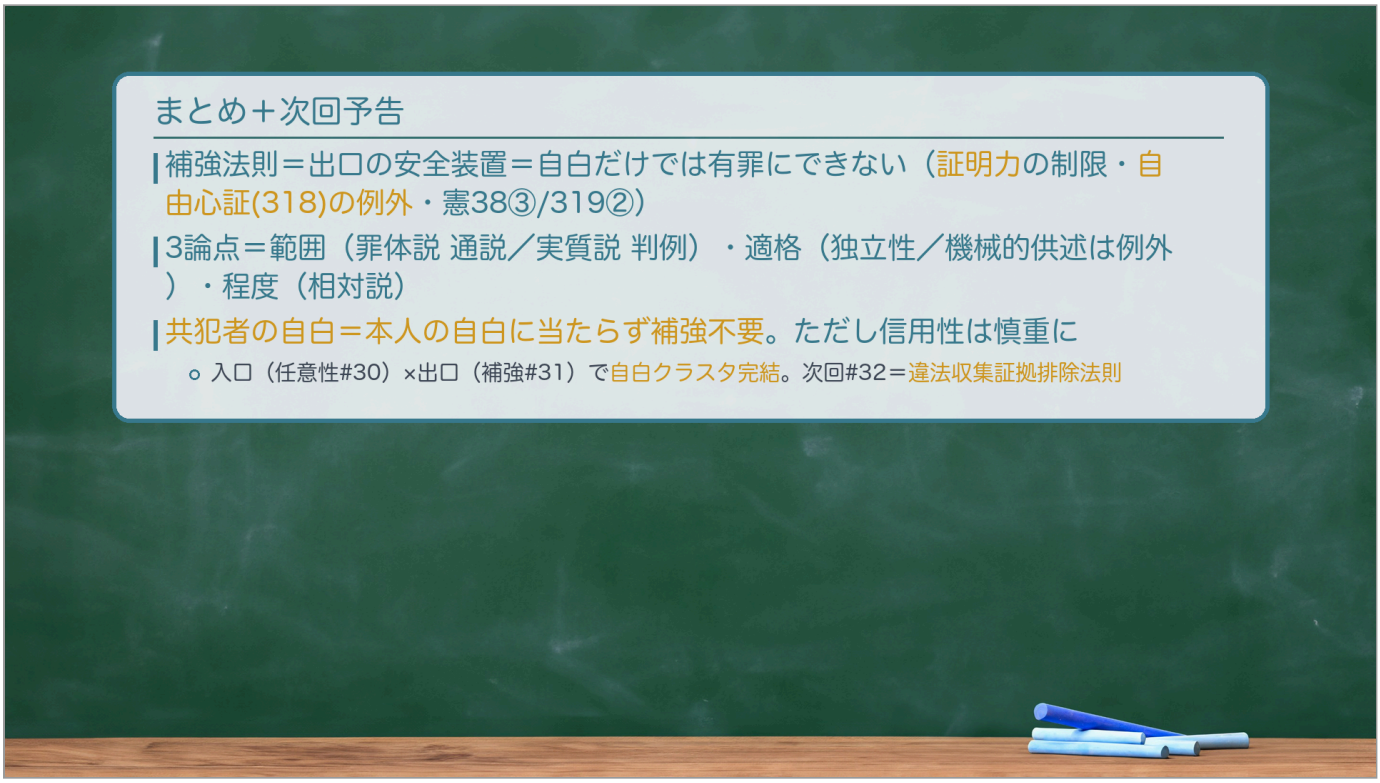
◆ 今日の地図（保存版）



図：今日の地図——補強法則と共犯者の自白の全体構造

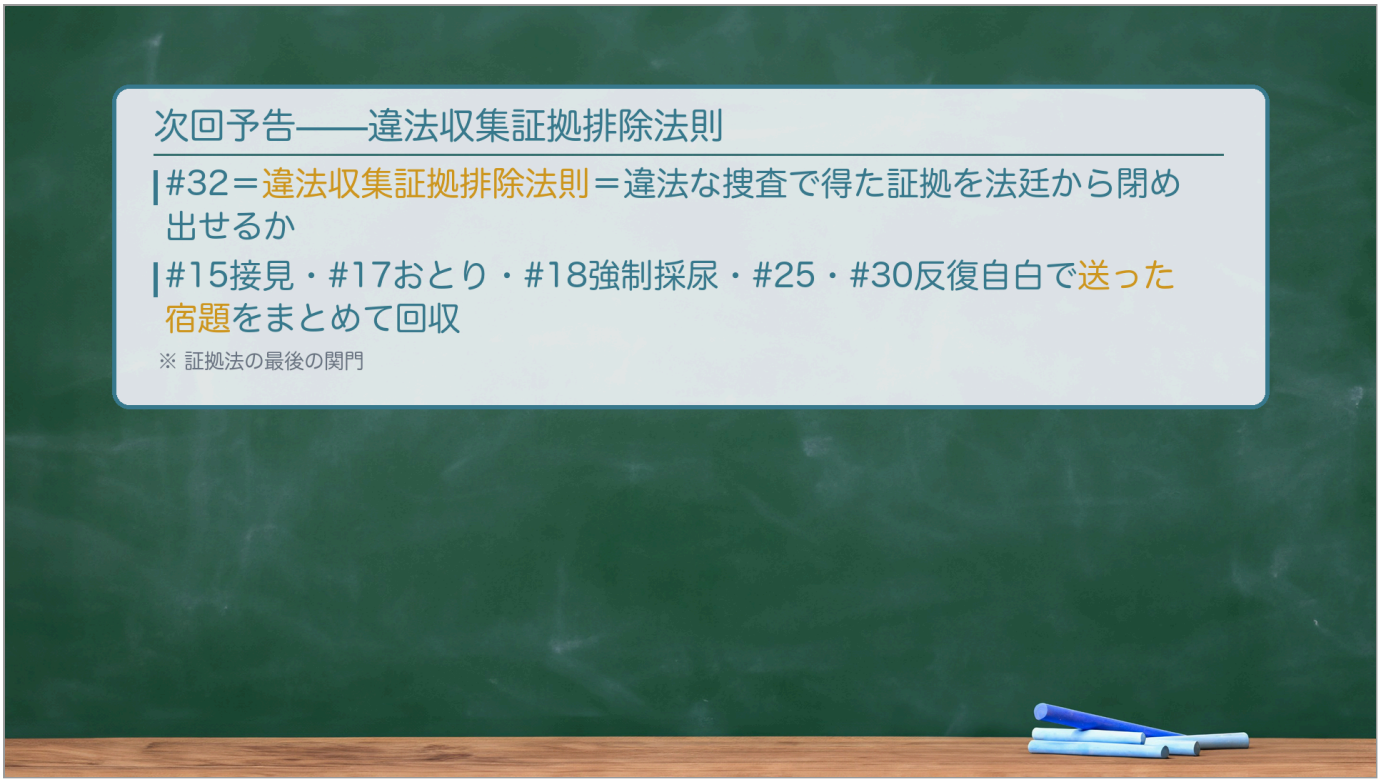


図：補強法則の3論点——範囲・適格・程度のまとめ



図：自白クラスタの完結——入口（任意性）と出口（補強法則）

- **補強法則の本質**：出口の安全装置。自白だけでは有罪にできない証明力の制限。自由心証主義（318条）の例外。
- **根拠**：憲法38条3項 ＋ 刑訴319条2項（刑訴が上乗せ）
- **補強の範囲**：通説＝罪体説、判例＝実質説（最判昭和24年4月30日）
- **補強証拠適格**：証拠能力 ＋ 自白からの独立性。機械的供述は例外（最二小決昭和32年11月2日）
- **補強の程度**：相対説——自白と合わせて確信できれば足りる
- **共同被告人の供述3ルート**：証人（要分離）／被告人質問（判例は無条件）／調書（321条1項各号）
- **共犯者の自白**：319条2項の「本人の自白」に当たらず補強不要——信用性は慎重に判断（練馬事件）
- 前回の任意性（入口）と今回の補強（出口）で、自白クラスタが完結



図：次回予告——違法収集証拠排除法則

次回は #32「違法収集証拠排除法則」。違法な捜査で得た証拠を法廷から閉め出せるか。捜査各回（接見・おとり・強制採尿）から送られてきた論点をまとめて回収します。